

(金のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

天狗山神社の秘密

小六・岡本 侑子

「待てえ！ とーまーれえー！」

快い秋晴れの下、黄色いイチョウの並木道を、怒声を飛ばして走る強そうな男子生徒がいた。

自分より年上の男子生徒から必死の思いで羽音は逃げていた。原因はおそらく数時間前のことだろうと想像していた。

通りかかった公園で年下の子たちがもめていた。そのケンカの仲裁に入った羽音のことを根に持った子がいて、兄に話を捻じ曲げて説明したらしく、「よくも俺の弟を！」などと叫びながら男子生徒は追かけてくる。

弁解しても無駄だと悟った羽音は、隠れる場所を探して逃げていた。よくお参りに行っている天狗山神社の裏手のくぼ地に身を潜めようと思っていた。天狗山神社は、御神木以外の木は枯れてしまっていて、小川の水も涸れているからか、まったく人気がないのだ。

神様、「めんなさい、あとで掃除をするので許してください！」と、心中で叫んだ羽音は、枯葉のない石畳の階段を飛ぶようにして駆け上がり、鳥居の前で素早く一礼して、くぼ地に身を寄せる。直後、男子生徒が鳥居にお辞儀もせず神社に飛び込んできた。

羽音を見つけられなかったようで、「出てこい、どこだ」と言いながらあたりを薄気味悪そうに見渡す。腹立ちまぎれに彼はなんと御神木の枝を手で折り、武器として自分の前に構えた。

その瞬間だった。さっきまでは静まり返っていた神社に、ひゅうつ、と空気を切り裂いて風が吹き込んできた。涸れていたはずの水があふれかえり、羽音の隠れているくぼ地に流れ込んできた。驚いて羽音が飛び出ると、強い風が羽音の体を近くのイチョウの大木まで吹き上げた。羽音は無我夢中で木にしがみついた。「うわあ!？」という声に頭を向けると、水でずぶぬれになり、風で体が宙に浮いている男子生徒がいた。枯れていたはずの木が一斉に葉を出し、きれいに色づく、と、風が吹いて木の葉を彼に浴びせて、そのまま男子生徒は神社から追い出された。

羽音はいきなりのことに幻でも見たのかとぼうぜんとしていた。羽音のいるイチョウの木も、葉が茂って黄色く染まっていた。

その色づいた葉のすき間から、飛ぶ鳥のような軽い動きで、風変わりな格好をした同い年ぐらいの三人の人が羽音のいる枝にたんと着地した。するとまた風が吹き、四人を下におろしてくれた。その三人は、着物と袴を着て、高下駄を履き、手には古い杖を握っている。羽音は直感でピンと分かった。この人たちが、魔法を使ったのだ。

「驚いた！ この神社には守り神様がいたのね」

羽音がそう言うと、「御神木が折られて緊急事態だったから出てきたの」としっかりしていきそうな女の子が言った。後ろに優しそうな女の子、いたずら好きそうな男の子がいる。

「私たちは天狗山神社の守り神、天狗よ！」

羽音は吃驚仰天した。天狗なんて、ただの日本の昔話だと思っただけだから。

「私は、風を操る天狗、風実」

しっかりしていきそうな女の子が言う。天狗って、赤い顔で長い鼻

のイメージだったけど、なんだか違うなあ、と羽音は感じた。

「私は水姫。水を操ることが得意なの」

優しそうな女の子が微笑みながら言った。

いたずら好きそうな男の子は、

「僕は植物の天狗、木戸だよ……って！　なんで二人とも自己紹介しているの!?!」

最初はほんわか笑っていたのに、いきなり慌てだした。

「自分だって自己紹介、していたじゃない。それにこの子、よく神社に来てくれている子よ？　挨拶したかったの」

「でも、天狗は緊急事態以外の時には出てこないことになっているから、人に見られたら困るからさ、これまでも見られた人の記憶を消して捻じ曲げてきただろ!?!」

ケンカがはじまってしまった。羽音のわくわくした気持ちが消えて、ゾツ、と鳥肌を立てて一歩後ろにあとずさった。記憶を消される、捻じ曲げられる、と聞いたからだ。自分もそうなると思うと足ががくがくとふるえる。

天狗たちはケンカをやめて真剣な話し合いを始めていた。羽音の記憶についてだった。羽音は怖くなって、あとずさりながら鳥居に近づく。三人が羽音を振り返った。

「あのさ……」

木戸がそう言って羽音に手を伸ばす。羽音は身をひるがえして駆けだした。

羽音は自分の部屋で落ち込んでいた。天狗のみんなに出会ったときは、感謝、わくわく、驚き、うれしさ……があっただけなのに。

羽音は嫌な思い出でも消されることは絶対に嫌だった。だってそれ

は、自分のものだから。

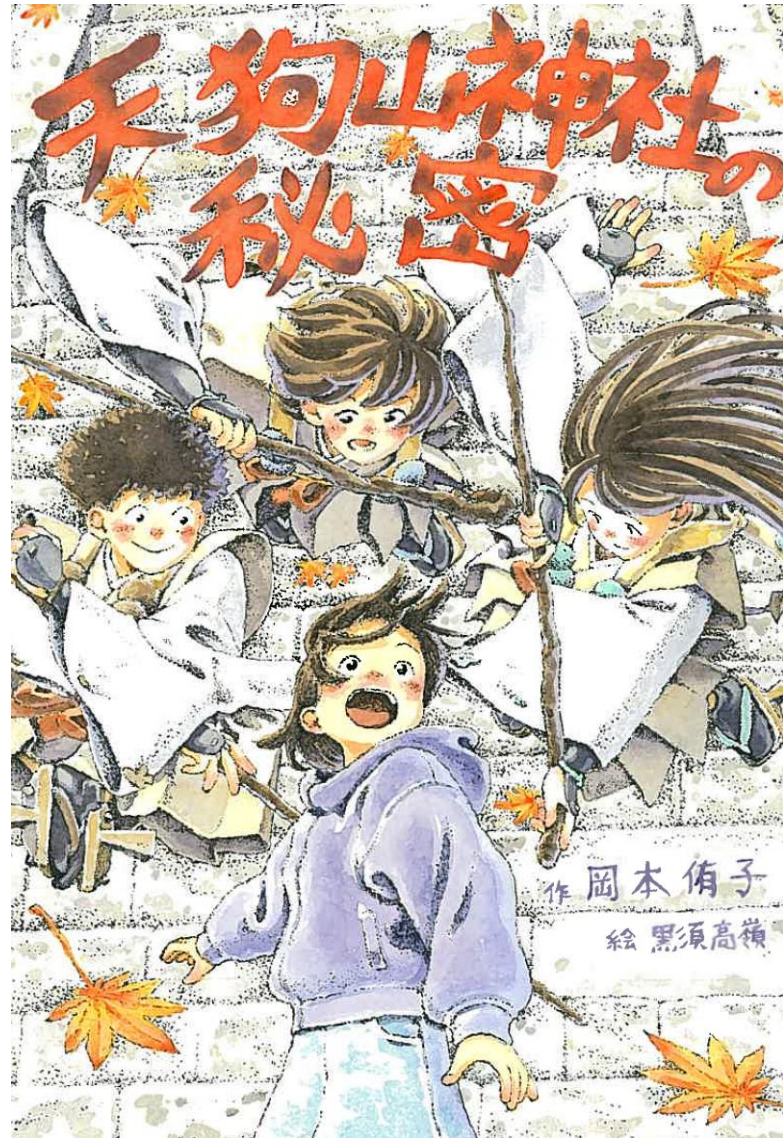
羽音はあまり神社に行く気にならなかったが、約束した神社の掃除をサボっていたので、こうしていると良心が痛む。羽音は空の色が金色になった時、決心して神社に出かけた。

用心しながら石畳の階段をのぼる。きれいな紅葉がたくさん落ちていた。時々、熊手で横によけておいた。天狗たちは、出てこない。羽音はちよつとホツとした。その時だった。

いきなり紅葉がぶわっ、と紙吹雪のように舞った。一枚一枚にありがとう、ごめんね、とぼかぼかする言葉が書いてあった。水は花火のように空に咲き、光りながら落ちてくる。羽音はすごく驚いて、すぐうれしかった。天狗たちは降りてきた。「来てくれてうれしい。記憶は絶対消さない。みんなに言わないのなら。私たち、あなたのことを知りたいの」水姫がそう言った。羽音は思い切り笑顔になった。「私の名前は、羽音。よろしくね」

自然に手を出し合い、四人は一斉に笑った。未来を追いかけるように夕日に向かって。

四人はひとつにつながった影法師を並べて、水のように澄みきった心で、風に吹かれる羽のように、葉のように、軽やかに駆けだした。



画：黒須 高嶺
